明

作者さんや読み手さんの声は
http://www.columnland.net/　にてどうぞ

ギラリと輝く虹色ネオン
闇を飲み込むこの街を
月がひっそり照らしてる
見えなくなった星たち想い
一人ぼっちで照らしてる

夜になっても眠らない
明るい街に月は言う
「覚えているか、この空に
瞬く星のその数は
ひとつやふたつじゃなかった」と

自分のことで忙しい
明るい街には月の声
聞こえず明るさ増してゆき
今夜も星を消してゆく

星の明かり

ぽつりと灯る民家の明かり
闇が飲み込むこの町を
月がひっそり照らしてる
空いっぱいに輝く星と
みんな仲良く照らしてる

足音さえも響くような
静かな町に星は言う
「忘れないでね、この空に
瞬く星のその数は
ひとつやふたつじゃないことを」

明日に備えて寝静まる
静かな町には星の声
どうか届いていますように

今夜も星が輝いた

まちの明かりと

ぺろぺろ

体育の時間、だるかったから先に教室戻ったんですよ。なんか暇だなと思ってたら半開きのロッカーが目について。あーあの子のロッカーだって気が付いたんです。名前は伏せときますけど、クラスで割りとかわいい子のね。で、まぁやっぱり気になるじゃないですか、何入ってるのかなとかどんな匂いするのかなとか考えてたらいてもたってもいられなくなって、ちょっとだけ覗いてみたんですよ。そしたら、まぁ匂いは特に無かったんですけど、リコーダーがあって。これあの子の唾ついてるんじゃねとか、もしこれ俺が吹いたら、とか考え始めたら正直テンション超あがった。いややっぱまずいだろそれはと思ったんだけど周りに誰も居ないじゃないですか。これが人生最大のチャンスで逃したら後悔するんじゃないか、って思ったらもう手に取ってました。でも今ちょうど吹いた瞬間にだれか戻ってきたらやばいし、真中に名前シール貼ってあるし言い訳できないな、とここで奇跡の完全犯罪に気がついちゃったんですよ。リコーダーって分解できるじゃないですか。ようするに吹く部分だけ手に入ればいいんですよ。分解して先の部品だけ自分のと付け替えれば、俺がなにやったかあの子も絶対気付かないし、名前シールがあってもこれでわかんない。しかもこれから音楽の時間にずーっとじっくり楽しめるわけで、じゃぁ今慌てる必要もないなと。冷静に実行して元通りロッカーにしまいました。

しばらくしたら授業終わってみんなちらほら戻ってきたけど、まぁ誰も俺に興味を示すこともなく次の授業になりました。あたりまえだよねなんのミスもしてないし。っていうかあんまり俺クラスのやつとしゃべったりしないし。

で、なんの問題もなく帰りの会になったんですけど、ここでまさかの展開だった。なんかいきなりその子が、あたしのリコーダーの先の部分が盗まれました、とか言い出すんですよ。いくらなんでもおかしいじゃないですか、見た目同じな訳だし、名前シールはそのままな訳です。もうすぐ音楽の授業でテストがあるから、練習のために使おうとしたのかもしれないけど、それでも無理でしょ。その時点で、なんか休みの時間にあの子の周りが数人で盛り上がってたのは思い出したんですが、まぁそれ自体はよくあることだし、仮にこの事件がばれてたとしても、俺がやったってことはわかんないはず。その子が発言してから教室はめっちゃざわついたけど、とりあえず興味ないっぽい雰囲気だしていつも通り机に突っ伏してました。

でまぁ、当然誰かが、なんでそんなことされたってわかったのか聞くじゃないですか。俺もそこはすごく気がかりだから寝た振りのまま聞き耳は全力で立てました。そしたら、うちのリコーダー口紅ついちゃってピンクの線入ってるけどそれがなくなってて、変だなと思ってよくみたら噛んだ後みたいなギザギザがついてて、T君に怖くなって相談したら盗んで交換されたんじゃね、って言われてそれで気づいた、だそうです。あーなるほどと思いつつ次の瞬間からすーっと力が抜けて膝が震えて耳がすげえ熱くなった。パニクるってこういうことなのかとかも思った。

先生が、やった人は正直に出てこい！って言って教室がめっちゃシーンとして。15分ぐらいその沈黙が続いた気がする。今思うとあせってただけで実際は30秒ぐらいだったのかもしれないけど、その沈黙の中、普段調子乗ってるKがいきなり、Yが怪しいんじゃね、何寝たふりしてんの、とか俺のこと名指しにしてきたんですよ。マジで焦った、うっかり反応して顔あげちゃって、は、いきなりふざけんなって言おうとしたんだけど声裏返って、ひぇ？みたいな変な声でちゃうし、何言ったらいいかわかんないししばらく固まっちゃって。そしたら周りの席のやつらが一斉にざーって机離してなんか距離とられて囲まれるみたいになって。自分で言うのもなんだけどもう明らかじゃないですか。もうこのままじゃ泣きそうだったし顔下に向けてずっと黙ってました。っていうかむしろ何言えばいいんだよって感じだったのもあるし。周りからマジであいつかよとかきもいとかやっぱりとか聞こえてきた。先生がお前がやったのか？とか言ってくるけど、それも何も言えずに黙ってた。そしたらなんか先生が、お前が正直じゃないと俺も悲しくなるよ、とかいろいろいって結局俺のロッカーが開けられて。

立たされてなんかいろいろ言われたけどもうどうでもよくなってて適当にはいはい言ってた。なんであの時口紅の跡に気づかなかったんだろうとか、こんなことならあの時すぐ吹いてしまっておけば、結局人来なかったから平気だったし、とかそんな感じ。こうやってほんの1分の行動で人生が変わっちゃうんだなぁとか、リコーダーの先端を交換するという作業がこれだけの状況を生み出してしまうのかとか考えてるうちに、もう座っていいとか言われたのでまた寝る振りしてました。

これが金曜日だったのが唯一の救いでいま日曜日なわけだけど学校行きたくない、怖い、殺されたらどうしよう、ああ、怖い怖い怖い怖い。

3 明けるとめでたいの？

正月の挨拶として「明けましておめでとうございます」という決まりきった表現がある。私もこう書かれた年賀状を数枚受け取っているのだが、ここで一つ疑問がわいてくる。果たして正月ってめでたいものなのか？　そこで正月について検証してみる。

テレビ：くだらなくてつまらない番組ばかり放送する。正月特別ドラマは臭い芝居でしかも退屈。さらに、テレビを見ながらゴロゴロしているとメタボになる。因習の一つ。強いて見るとすればニューイヤーコンサート程度か？

食べ物：おせち料理がうまいという人はまずいないだろう。むしろ、「まずい」「人間の食べるものではない」「スイーツ？」といった所が正直な感想だろう。さらに、おせち料理は基本的に味付けが濃い。従ってちょっと食べただけでも栄養の取り過ぎ&まずい&メタボになる。

初詣：有名寺社に電車でお参りに行くという方もいるだろう。だが、そういうときの電車というものは混んでいるものだ。それで、乗客はいつものサラリーマンと違って普段電車に乗らない奴らが結構いる。そういう奴らに限って電車の出入り口に立ち止まる。そいつらをよく見るとカップルだったり…。大掃除の時のゴミがまだ残っているのかとがっかりする。

親戚の会合：親戚一同が集まって表向きは楽しそうにする会合。だがあくまで表向きが楽しいのである。裏ではというと、遺産相続をめぐって遠回しにあてつけたり、誰かの愚痴をタダで聞いたり、憎たらしい親戚の顔を見なければいけない我慢大会。

お年玉：こんな不景気だからお年玉なしなんて方もおられるだろう。お年玉をもらったとしても新年会で使い果たす&食べ過ぎでメタボになる&飲み過ぎて二日酔い。

暇：人間忙しい時はある意味充実してると言える。だが、突然暇となるとこれから何をしていいのかわからない&退屈でゴロゴロと横になるしかないというのが現実である。これは、精神的にも肉体的にも不健康とい言わざるを得ない。ひどいケースだと精神病またはメタボになる可能性がある。

このように正月は精神病、消化不良、家庭内紛争、メタボの原因になる。従って正月を理想の休日とするのは誤りでむしろ呪われた休日ではないか。従って来年からは正月を中止にするか「明けても不幸ですね」と正月は挨拶すべきなのである。

別れの言葉

真っ白な寝間着に身を包み、たおやかに微笑む彼女。僕の妻。生活感の薄い無味乾燥な病室のなか、窓から流れ込む緩い夜風に、その前髪が僅かに揺れる。

「きっとうまくいくよ」

べた塗りされた静寂に耐えきれなくなって、僕が言う。でも嘘だ。どうせうまくいきっこない、そう僕は思っている。その証拠に、ほら、僕の視線は彼女ではなく、脇の花瓶へと向けられている。嘘をつくときに眼をそらす、子供の頃からの僕の癖だ。

ヒュートエリⅢ型血液欠陥。彼女の細く白い首を縊りあげる、それが死神の名だ。回復の見込みは、ほとんどない。それでも僅かな望みに期待をかけ、僕らは今回の手術を決意したのだったが、それもいまでは揺らいでいる。少なくとも、僕は。

「先生だって、心配することは無いって言っていたし」

それももちろん嘘だ。成功の確率は一割もないと、担当の医師は言ったのだ。なのに、そんな僕のがらんどうの気休めに、彼女はやはり笑顔で頷く。

（……違う）

僕が言いたいのは、僕が言わなくてはいけないのは、そんな言葉ではない。こんな嘘まみれの気休めではない。本当は僕は、別れの言葉をこそ、言うべきなのだ。

予定された彼女の手術日は、まさに明日だ。明日の午前九時に、彼女は麻酔をかけられ手術台に載せられる。それはつまり、今夜を最後にもう彼女と会えなくなるということだ。もう彼女と話せなくなるということだ。それを思うと、僕は気が狂いそうになる。けれど、だからこそ僕は、彼女に別れの言葉を言わなくてはいけない。心の底から愛していたと。いままで一緒にいてくれて本当にありがとうと。

それなのに僕は、看護師が面会時間の終了を報せに来るまで、ついに別れの言葉を言うことができなかった。荷物をまとめ、椅子から立ち上がったところでもう一度彼女に向きなおったが、やはりなにも言えそうになかった。そんな僕を見かねたのか、彼女が随分と細くなった手で僕の服の裾をつかみ、そして言う。

「なにか、言うことがあるんじゃない？」

もしも鈴が話せたら、きっとこんな声で話すのだろう。透明なのに凛とした、彼女の声。

「いや、その」

あまりに突然の彼女の行動に、僕はつい言い淀んでしまう。本当は僕が気を遣ってやらなくてはいけないのにと、ひどく自分がみじめになる。

「仕方がないなぁタカ君は」

ほんの少し頬を膨らませながら、彼女が急に僕を引き寄せる。そして、思わずベッドに倒れかかった僕に、彼女は優しく口づけをする。燃えるように熱い、命の感触。

「そんなに心配しなくても、私はちゃんと戻ってくるから、病気に負けたりなんかしないから。だからねタカ君」

僕には到底真似できない力強い声で、彼女は言う。

「また明日」

ひとりぼっちの夜

暗い。
電気をつけているのに暗い。
ストーブをつけているのに寒い。
音楽をかけているのに静かだ。

レポート、読書、テレビ、インターネット……
何をしても何一つ続かない。
意欲と集中が、端から切れてなくなっていく。

――俺は一体何がしたいんだ？
――そもそも何がしたかったんだ？
そんな問い掛けばかりが、何度も脳を駆けめぐって離れない。

プルルルル、プルルルル、プルルルル……

携帯電話に灯った小さな光が、不思議と明るく頼もしく思えた。

使い道はあなたしだい

「助手君！『ＭＩＪＩＮ』が完成したぞ！」
白衣に眼鏡に爆発頭。いかにも博士らしい博士がいかにもやる気の無さそうな助手を呼びつけた。
「ああ、万能みじん切りマシンですか。こないだまな板までみじん切りにしたから諦めたと思ってました。」
「ふっふっふ。私の諦めの悪さをなめないよ～に。ちゃんとパワーを下方修正した。」
「でも、弱すぎません？豆腐切るのに苦労してますよ、こいつ。」

その夜、博士が『ＭＩＪＩＮ』の調整をしていると、いきなり後ろから襲われて縛りあげられた。発明家のもとに強盗がくるのはおきまりのパターンである。隣室で寝ていた助手もあっさりと捕まった。
「なにか面白いものを完成させたらしいな、じーさん。命が惜しければそいつを出せ！」
うわー常套句だ。助手は心の中でつっこんだ。
「・・・わかった。その発明品とはこれ、万能みじん切りマシン『ＭＩＪＩＮ』だ！」
なぜか非常に誇らしげな博士。強盗の目は点になっている。
「こいつの手にかかればみじん切りに出来ないものなぞ無い！モヤシからマグロまで、なんでも完璧にみじん切りにしてしまうのだ！」
「それで？」
「ん？それだけだが。」
強盗が脱力している。そりゃそうだろうね。
ふと、ある発明品が強盗の目に止まった。
「じゃ、こいつは？」
「ああ、それは『菌だ一』、菌を生み出す装置だ。自動杏仁豆腐製造装置、略してＪＡＳを作っていたら失敗した。」
「金！もの凄い発明品じゃねぇか！なぁ、じーさん。俺はこういう発明品を期待してたんだ。みじん切りマシンなんているか！」
「『ＭＩＪＩＮ』より使い道が無いと思うがなぁ。だって大量の菌だぞ？」
「大量の金の、どこに問題がある？しかるべきところで換金してもらえばいいだろうが。何を言ってるんだ。」
「監禁？お前は何がしたいんだ？」
助手はクズ共の噛み合わない会話に呆れていた。こいつらバカか？しかし、これは不用品を処分するチャンスだ。
「え～と、強盗さん？」
「後藤じゃない、佐藤だ。」
「(あ、バカなんだ。)佐藤さん、先生は世間の常識に疎いもので・・・。」
凄く納得する強盗、いや佐藤。抗議している博士は無視だ。
「先生のたわ言は気にしないで下さい。『菌だ一』は差し上げます。」
「あ、当たり前だ！これはもらっていくぞ！確か、おまえは助手だよな。博士の方よりも話が通じそうだ。他になんか無いか？」
「そうですね・・・。読経が身につくリストバンドはいかがです？」
「度胸か、なるほど。俺には必要ないかもしれないが、もらっておこう。」
そこに空気の読めない博士が口を挟んだ。
「それは寺の坊主用に開発したものだぞ？そんなもの持って行ってどうするんだ。」
空気読め！バカかあんたは！助手は声にならない声をあげ、フォローにまわった。
「ほら、幽霊とか出ますから。読経が身についてないと命にかかわるでしょ。」
「そうか、坊主も度胸が無いとやってられないんだな。」
納得した佐藤。ついでに二、三の発明品を押し付けて、お帰り願った。

「助手君！星占い機能つき目覚まし時計『目覚まし君』が完成したぞ！」
「はいはい、ごくろーさまです。」
今日も博士は相変わらずです。

京都の明かりで

「なんでこんなにアベックばっかりいよるんかいなあ?」
「そら今日かて、みな来よる日やろし…。」

なんでこないに混んどるのか、春香は知ろうとも健二は知らんかった。春香は少しだけ期待しとったのも知らんと、健二はのんきにしとおった。なにせ宇治にシュッと建つ大観覧車に二人で乗ろうとしとったんやから。その日は世間では祭りやったんにな。

「ほらやっと乗れたで。そっち乗りいや。」
「やん。観覧車てうち怖いからよう揺らさんといてっていつも言うてるやん。」
「いやぁ。うちはそういわれっともっとようしたなるな。ほーらほーら!」

健二はやっぱりニブチンやから。春香の期待なんかガラガラ〜ッってかんじやった。座るやいなや観覧車の席を揺らし始めおった。そんときはたまたま風も強かって、ゴンドラの中でも音がびうびういうとった。おかげで春香はもうすっかり怖なって京都の景色も見んとうずくまってしもた。

「春香?…はるか?」
「もうそんな健二なん、していらん!」
「ほら、こっち見てみ。京都タワーがきれいやんよ。」
「そんなんよう見ん!」

そらあんだけやれば春香も怒るがな。それから二人は黙りこくって何もよう話さんかった。でも何でかね、だいたい頂上に行く頃には仲直りしとるんよ。不思議な仲や。観覧車に乗りに行くたんびにいちいち喧嘩して、いちいち仲直りしよる。ほら、今日も頂上に着いた。二人はまた話しとるよ。

「やっぱりうちは怖いけどここから見る京都が一番好きや。」
「うちもや。春香とみる京都が一番好きなんよ。」
「!!!!!!!!…やっぱり健二はいらん! 出てけ! ここから落ちて死に!」

あ〜あ、また喧嘩しよった。しょーもないやっちゃな。
けれどもまだ、京都の灯は明るいんやから…な? ほらみてみ、

「すまん春香、こういうときはやっぱり『君の方がきれいだよ』やな。」
「やめいて!そんなんいわれたらうちもうはずかしゆうてはずかしゆう…。」

京都は二人を見守っとる。それだけは間違いないで。

むかしむかし、

二人のお姫様がいました。一人の名前は太陽の姫といい、もう一人の名前は月の姫といいました。その国の王様が国に明るい未来があるようにという意味で「明」の字に使われている日と月から二人の名前を決めました。王様が亡くなったあと、二人は太陽が空に輝いている時間は太陽の姫が、月が空に浮かぶ時間は月の姫が国を治めようと約束しました。太陽の姫は人々が豊かに生活していくようにいろいろな法律を作り、学校や病院を建てました。月の姫は人々が寝静まったあとにつく街頭の設置や夜間の国の警備などを行いました。この時代には国の外の森には怪物や獣がいるとおそれられていたので人々は仕事が終わると外には出ずに、皆ベットに入りそのまま寝てしまっていました。

月の姫は思いました。

「私がいなくても太陽の姫さえいれば国は平和でしょう。夜間の国なんて誰も見ないんだから。私は何も出来ない月と同じ。太陽が出ているときはみんな外に出てお仕事をしたり、遊んだりする。でも、月が出ると、月に背を向けてベットで寝るだけ。いったい誰が私を必要とするだろう。」

そんなある日、夜もふけたころに、月の姫の部屋にどこからともなく年老いた魔女が現れました。

「月の姫、おまえは自分が人々に対して何も出来ない事を嘆いているんだね？」

「はい、そうです。私がいなくても太陽の姫さえ入れば国には明るい未来があると思います。」

「そうかい、なら、ここにいるのではなく私の仕事を手伝っておくれ。」

そういうと魔女はもっていた杖をふるいました。

その日からこの国にはお姫様が一人消えました。

月の姫は魔女の館で一生懸命働きました。お城ほど裕福ではないけれど、自分がちゃんと誰かの役に立っているという実感があったので仕事もさほど苦ではありませんでした。

ある日、魔女の部屋を掃除していると見たいものを全て写す水晶玉を見つけました。月の姫は故郷から離れていた寂しさから自分の故郷を思い浮かべました。すると、水晶に移った人たちはみんなベットの中でがたがた震えていたのです。町から夜の警備が消えたという知らせといつもついていた窓の外の明かりが消えたことで、人々は家のすぐ外に怪物や獣がいるんじゃないかと怯えていたのです。そこに魔女がやってきて言いました。

「月の姫、あんたは自分を役立たずと思ってたかもしれないけど、あんたはちゃんと人の役に立ってたよ。あなたは自信を持てなかっただけだよ。」

「ああ、おばさん。あたしは戻らなくてはいけません。いまあたしがやるべき事がわかりました。」魔女は小さくうなずき、杖をふるいました。

月の姫はきづくとお城の自分の部屋にいつの間にかにいました。すぐに太陽の姫のところにはいき、太陽の姫に今までのことを話しました。すると、太陽の姫がいいました。

「夜に輝く月がなくなったら、月の友達の星々も悲しんで輝く事をやめるでしょう。太陽がいくら光り輝いても、夜にその光を皆にかわりに届けてくれる月が必要です。月がいなくなったら、みんな暗いなかで不安になって誰もゆっくり寝ないのです。あなたも同じようにとても大切なんですよ。」

それから、月の姫はまた夜の国を優しく守る仕事を再開しました。月の姫と太陽の姫がいるこの国はそれから先とても平和になりました。

憧憬

中学生の頃の記憶と言われて、一番最初に思い浮かぶのは、冬の晴れ渡った明るい町並みである。

私の町は2階以上の建物はほとんどなく、4階まであがれば遠くまで見渡せた。晴れた日ならば、家々の屋根がキラキラと反射して眩しいほど光で溢れる。昼間の住宅街は人気もなく静かで、たまに何処かで布団を叩く音なんかが聞こえた。まさに平和で穏やかな風景。

私はよく一人で、教室や廊下の窓から、その景色を眺めていた。

けれど、私はその光景が好きな訳ではなかった。

それどころか大嫌いだった。

私は闘いを挑む人のように、それを見据える。逃げたくなる衝動を堪えて、両足でふんばる。助けを求める声は出してはいけない。目を背けた瞬間が敗北だ。

敵はいつでも圧倒的で、優しさを装っては私の孤独につけこんだ。

だから嫌いだった。

目の前の光景が、明るくなればなるほど、人に愛されれば愛されるほど、私は一人惨めになり、その惨めさが徐々に胸の内に溜まっていき、次第に絶望に染められていくのだ。

「じゃあなんで見ていたのさ」

君はそう言って明るく笑った。

その答えを返せずうつ向くと、また笑う。今度は優しく。

やがて友人が呼ぶ声が聞こえると、すぐにそちらへ行ってしまった。

「……君が好きなのと同じ理由だよ」

友人たちと楽しそうに話す君。それを遠くから見ながら呟いた言葉は、君には届いていない。

明って字、嫌いなんだよね。

目の前で陽が消えていく

普段は鏡でしかない球の

二十年振りの反抗

何か二人が喧嘩してるみたいで。

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	まちの明かりと星の明かり	8 pt	4 位	0 sp
		リズムがとてもいい。 　そのリズムとともに、対比的な景色が、そして、それぞれの景色を支える思いたちまでもふるふる立ち現れてきて、ラスト、流れ星が夜空をよぎってゆきそうな。 　とても完成度の高い「今年の表紙」さんでした。 鹿児島の夜空、そうかあと作者さんトークにナットク。		
02	ぺろぺろ	10 pt	2 位	2 sp
		できごころ。 　なのに暴走して、こうなっちゃう。怒濤のトークで悲劇一直線。 　恐い恐い、今年の初夢でした。 　これだけ順位戦で注目の的になれば、本望のシルバー・メダルでしょう。 特別賞：口紅賞 by 佐藤さん班（圧倒的リアリティ）/　賞直に出るわけがない by さよならTeen班 イチオシフレーズ：「ぺろぺろ」（俺ってキレると周りとか見えなくなるタイプなんだよな。――by電球）「ひぇ？」「ああ、怖い怖い怖い怖い」		
03	明けるとめでたいの？	1 pt	8 位	1 sp
		お正月の意外なほどのつまらなさ。 　実感に即して語っていただきました。親戚の会合のくだりなど、なかなかにシニカルかつシャープな視点が光ってます。 　ただし、メタボは連呼しすぎだってば。 特別賞：やせたいだけじゃないんで賞か？ by Mijin班（メタボ多用）		
		19 pt	1 位	1 sp

04	別れの言葉	別れの言葉が「また明日」。哀切ですね。 　「もしも鈴が話せたら」のくだりで、しっかり彼女の声が聞こえてきます。 　さよなら、メタボ。ついにダイエットに成功！ の作者さんでした。 　2にダブルスコアの初春金メダル、おめでとうっ!! 特別賞：TA賞 by 2009班（5と。素晴らしい合わせ技） イチオシフレーズ：「仕方がないなあ、タカ君は」
		1 pt　8 位　3 sp
05	ひとりぼっちの夜	闇夜に漂う船が灯台の明かりを見つけたような。 　外界とつながる唯一の窓明かり。視覚的にともしていただいて、ラスト、ほっとなごめます。 　しんみりと心にしみて、最多特別賞でした。 特別賞：どうせメルマガで賞 by USHI班（悲しいよね、メルマガだと尚更）/　私が行きま賞！ by 200X年（遊びに行く！）/　TA賞 by 2009班（４と。素晴らしい合わせ技）
		9 pt　3 位　0 sp
06	使い道はあなたしだい	のんきな博士さんと、はしっこい助手さんの対比が絶妙で、なんだか続き物にしてほしいラストの「相変わらず」でした。 　そして、やったね！　鳥から羽ばたいた専門店さん。ブロンズメダル（2には1ポイントで負けたけどね！）＆今週のイチオシフレーズ大賞です。 イチオシフレーズ：「後藤じゃない、佐藤だ。」「略してJAS」「菌だー」「今日も博士は相変わらずです。」
		3 pt　6 位　2 sp
07	京都の明かりで	

		変身が続きます。こちらは北海道から京都へ。 ほっこりまったり、さすがの方言使いです。 ただ「観覧車」の動きは見えたけど「観覧者」＝語り手の位置が見えにくい。京都弁ナレーションという趣向だったでしょうか。 特別賞：和賞（昭和） by Shine班（アベックの４文字で全体の空気を作り出した神技） /バカップルで賞 by　おとそinさかづき班（とてもほほえましい）
08	むかしむかし、	3 pt　6 位　1 sp 二人のお姫さま。メルヘンタッチのふんわりストーリー。魔女すら悪いヤツじゃない。 でも、これから先、ずうーっとお姫さまではいられないわけで、そのあたりどうなるのかなあ、とちょっと意地悪な魔女的読みを入れてみたり。 特別賞：Newタイプ魔☆女賞 by SORCERER班 イチオシフレーズ：「ああ、おばさん」
09	憧憬	1 pt　8 位　0 sp 気持ちをすなおに語っている感なのですけれど、意外に解釈がむずかしい。 ふるさとを懐かしみつつ、そこを超えてゆきたいという衝動が「大嫌い」なのでしょうか。そうすると、「君が好きなのと同じ理由」は？ 作者さあん、解説を宜しくっ。
10	(皆既日食）	4 pt　5 位　1 sp 文字遊び。詩的で洒脱な言い回しも効いてましたし、しっかり今年ネタも入ってインパクト大。 さらに視覚的に見せても良かったか。 特別賞：作者は気づいていたで賞か？ by 小さなVAIO班（遠近法に気づいていたかどうか） イチオシフレーズ：「二十年振りの反抗」